徳教が合理化へ向かっているとは言い難い．しかし読み手に対して教団の今後更なる変革を予感させる描写の数々は，本書がいかに意欲的なモノグラフであるかを表しているといえるだろう．

次に問題点について述べる．それは徳教の核でもある扶鸞の扱いであり，そこに一貫性が欠けていたことが，教団外部に存在するはずの華人コミュニティに関する描写を犠牲にしてしまったように思われる．穿った見方になるが，そもそも部外者にとっては全ての託宣が人為的なものでしかない．確かに，扶鸞に現れる神意に人意が介入する可能性は言及されているが（p. 84，p. 164，p. 214），それでは何故黎明期の扶鸞の多くは無批判に引用されているのかとの疑念が浮かぶ．また今日の一般信者の宗教実践に関しても，位階制の存在や神の万能性を示唆するだけでは，その影響力の理由を十分に説明できたとは言い難い．敢えて教団を去っていった者や，扶鸞の肯定・否定の裏にある世俗的な側面について重層的な記述をすることで，より説得力を増すことが可能だったのではないだろうか．

しかしながら，これは本書の価値を損なうものではなく，宗教人類学を基本としながらも宗教社会学まで射程に収めている幅広さ故に生じた問題であろう．3ヵ国の華人社会における，多くの類似組織を比較調査した著者の視点・手腕は感服に値するものであり，本書が多くの領域から関心を集めることが可能な一冊であることは間違いない．今後，より長期的な考察がなされることを願ってやまないのである．

須永和博．『エコツーリズムの民族誌―北タイ山地民カレンの生活世界』春風社，2012 年，435 p.

田崎郁子 *

カレンはタイ国に居住する少数民族として最大の人口を占め，タイで「山地民」と称される人々の位置づけを考える際に重要な存在である．カレンと森との関りや生業のあり様は，常に民族表象と結び付けられて語られてきた．特に 1980 年代以降，タイでの環境保護運動や NGO 活動の高まりを背景に，NGO や一部の指導的なカレンらが土地権主張の運動を展開し，森と共生する知恵をもつカレン像を強調するようになると，これに関する人類学的研究も蓄積されていった．しかし，近年のカレンの森林利用や環境運動との関連で民族表象を取り扱った先行研究では，その政治的意義を「社会的弱者による抵抗か，外部者によるカレンのロマン化か」と大局的に論ずる傾向にあった．そしてそこでは，実際に運動や言説が一般のカレンの人々にどのように受容され影響を与えてきたのかが見落とされてきた，と著者は指摘する．これに対して本書は，カレンの人々が村で携わるエコツーリズムの実践を例に，観光と森林利用や少数民族であることへの関りをめぐって生起するさまざまな立場の人々の交渉や調整に焦点を当てている．それによって，ミクロな視点から上記の二項対立には回収されない少数民族のあり方を示し，ローカルな生活

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科，日本学術振興会特別研究員（PD）

の再編過程に迫ろうとしている．

第1章では本書の理論的展望が示されている．エコツーリズムという現象は，多様なアクター間の交渉や協働を含む複雑な社会関係の中で生起する．そこで本書の目的として，国家やグローバリゼーションといった権力作用と行為主体の実践との関係に着目し，その社会的・文化的交渉のプロセスを記述することが掲げられる．著者は，エコツーリズムという言説には，環境保護に市場価値を見出して商品化しグローバルな市場経済原理へと回収していく傾向があるために，エコツーリズムを観光のあり方の「新しい何か」として扱ってしまうと権力作用がみえにくくなる恐れがあることを指摘する．同時に，貧者がうたう「森との共生の知恵」をローカル社会による抵抗として単純化することを避けるために，「観光によって不平等な関係が再生産されてきたという議論と…『抵抗』を主題化する議論は，相容れないものではなく，むしろ観光をめぐって両者が交錯しあいながら複雑な社会関係が形成」（p. 84）されていく，そのプロセスに着目するべきだと主張する．

第2章では，タイの国民国家形成の歴史を辿りながら，西洋的なネーションとしての均質な「タイ人」が創出・構築されていくのと表裏一体に，カレンが少数民族として周辺化されてきた過程を示している．19世紀から20世紀初頭にバンコクを中心とした中央統治化が進行する中で，カレンと北タイ王朝との貢納関係が断たれ，ローカルな民族関係が忘却されてきたこと．さらに1950年代以降に領域統治の概念が北部山地まで浸透し，国境の政治的重要性が増す中で，多様な背景をもつタイ北部の非タイ系民族は「山地民」と一括されたこと．そして「タイ化されるべき他者」へと位置づけ直され，教育・仏教・開発など多岐にわたる山地民政策の対象となってきた過程がまとめられている．

第3章では，タイにおける森の資源化と山地民の周縁化の歴史の中に，エコツーリズムを位置づけている．19世紀から始まる王室森林局主導の政策では，森はチークなど貴重な経済的資源を有するものだと捉えられていた．それが1950年代以降西欧的な自然保護思想や森林減少に直面する中で，手つかずの原生自然がもてはやされるようになり，政策は森林保護へと転換する．同時にカレンをはじめとする山地民は森を破壊すると非難された．これに対して，90年代に入ると山地コミュニティによる慣習的森林利用権や土地権を求める運動の中で，「森を守る山地民の在地の知恵」が語られ始めるようになる．そして，タイではこの中から，森と森を守る文化を資源とみなすようなエコツーリズムが，地域コミュニティの計画立案・運営への積極的参加のもとで展開する独自のものとして生まれてきた．著者は，このようにエコツーリズムの政治性を明らかにしたうえで，「（エコツーリズムという現象を）植民地主義から今日のグローバリゼーションにいたる森林の資源化の一形態として，その歴史的流れの中に位置づけることで相対化する必要がある」（p. 191）と主張する．

第4章ではタイの山地社会が観光というマクロなシステムに巻き込まれてきた歴史的

過程を考察している．タイ人らしさや国民文化を演出する国家主体の観光政策における公式イメージとは別の文脈で，山地民観光の資源化は，70 年代頃から，未開文化を求める先進国ツーリストのまなざしと，そのまなざしに着目した平地タイ人の仲介者らによって発展してきた．90 年代に入ると政府も山地民観光へ注目し始め，王室プロジェクトを中心とした観光開発が促進される．さらに NGO 支援のもとで，ホストとなる地域社会が観光の開発・運営に積極的に関って，利益を地域に還元すべきであるという考えに基づいたコミュニティ・ベース・ツーリズム（以下 CBT）が生まれる．

続く第 5 章では，CBT の一例として北タイのカレン社会における観光実践が考察される．調査対象である 2 つの村の生業は水田・焼畑を中心とした稲作，畜産や出稼ぎから成る．高まる現金収入の必要性の中で，CBT は貴重な収入源のひとつである．両村で 90 年代後半以降に導入された CBT によって村を訪れた人々は，カレンのローカルガイドとともに，彼らの語る在地の知恵に耳を傾け，カレン文化を学ぶ．村ではグループを作って CBT の管理・運営にあたる．そして NGO の支援を元に，ツーリスト受入れにあたっての，カレン文化の提示の仕方などといった特定の知識や技能を習得し，村人はローカルガイドとなっていく．著者はその過程を描写しながら，当初 CBT 導入に不安のあった村人が，観光という近代に参加することの自信や誇りをツーリズムに見出そうとしたり，自らの文化を再発見していると評価する．さらに，こういった知識や技能は，単にツーリストの欲望や西洋的な環境保護思想に迎合するために「観光という文脈でのみ生産されているわけではなく…資源利用における様々な慣習的実践を環境保護の枠組みの中で再解釈することを通じて，『森林保護者としてのカレン』というアイデンティティを構築し…それが森林局をはじめとする政府機関との森林利用権をめぐる交渉のツールとなり，カレン自身が持続可能な森林利用を意識化することにもつながっている」（pp. 342-343）と論ずる．また，村人は，他の生業に比べてはるかに高収入である CBT への参加頻度を，月に 1-2 度以上には高めようとしない．ここから，利益の最大化や拡大再生産といった資本主義的論理に絡めとられたり，ルーティン化された労働に転化することなく，村人にとって「楽しく」「非日常的な」体験として観光を維持する人々の志向性を読み取っている．

第 6 章では，カレンの人々がミクロなレベルで環境運動やエコツーリズムに関ることで，資本主義的開発のリスクや政府主導で行なわれてきた森林政策などを学習し，個々の状況に制約を受けながらも，従来の山地民政策や森林政策で否定的に位置づけられてきた「カレン」「山地民」「焼畑」といった存在を肯定的に捉え直す過程を，多様な立場の人々の実践から明らかにしている．

本書前半では，それぞれ山地民，森林の資源化，観光というキーワード／現象が，タイ社会の政治的・歴史的変遷の中で定義・解釈されてきた過程を辿っている．そして，その中から山地民を対象にしたエコツーリズム

が生起してきたことを示している．ここでは，タイのカレンを考える際に避けては通れない，森林政策や環境運動をめぐる言説とその中でのカレンのあり方についての全体像が，3つのキーワードに沿った歴史的変遷として丁寧に整理されている．特に従来の先行研究においてはそれぞれの著者の興味の方向性に引っ張られて論じられてきた諸処の議論が，二次文献を綿密に検討することで通史的にまとめ直されている．本書は，東南アジア山地社会に興味をもつ評者のようなものにとって非常に貴重な参考書となるだろう．また，後半の5，6章は本書のハイライトともいえ，フィールド調査に基づいた民族誌的記述によって観光や環境運動を通じたカレンの多様な自己形成過程が明らかにされている．ここでは，先行研究を丁寧に辿ることで，森林破壊者として周縁化されてきた少数民族の人々の「森と共生する知恵」を鼓舞するような潮流に関して，それを政治的弱者による抵抗かあるいはカレン文化のロマン化か，で論じてきた従来の二項対立的な議論の問題点が指摘されている．そして，ミクロなレベルから人々の実践のあり方を描くことでこれを克服しようとしていることは大変興味深い．

さて，最後になるが，評者はキリスト教宣教と市場経済化の観点からカレンの社会変容に関心をもっており，そうした視点から敢えて気がついたことを述べてみる．民族誌的な記述が中心になっている5，6章では，カレンの人々にとってエコツーリズムや環境運動に携わることのプラスの側面の強調が目立つ．そのため，言説を作る社会（あるいは作られた言説）VSそれに対応するマイノリティとしてのカレン，という対立的な構図が見え隠れする．それが，本書の結論部において，権力側からかぶせられてくる言説や市場経済化といった不可避なものへと絡め取られないようなカレンのあり方を無批判に自律性（p. 404）として描くことにつながっているように思われる．けれどもこれでは，著者の意図する「多様なアクター間の交渉や協働を含む複雑な社会関係」や「社会的・文化的交渉のプロセスを記述すること」がみえにくくなるのではないか．おそらく著者が村でエコツーリズムに積極的に関っている人を中心に調査を進めたがゆえに，この動きに周縁的な人がどう関っているのか，という点は本書ではあまり言及されなかった．しかしたとえば，村の中心から周縁までどのような多様な立場があり，権力関係も含めた村の中の関係性との絡み合いで彼らがエコツーリズム導入による変化にどう関っているのか，あるいはエコツーリズムや環境運動への関与が村の社会関係をどう表出させ，それが村の生活の再編をどう促していくのか．このような点に着目してみたら，弱者による抵抗か伝統文化のロマン化かという二項対立を脱却しようとするがゆえにそこに議論そのものが絡め取られてしまうような状況に陥ることなく，カレンの人々がおかれている現状をより説得的に描き出せるのではないだろうか．

とはいうものの，これで本書の価値が損なわれるわけではない．前半部でタイ山地研究を貫く重要な問題点を分かりやすく整理しているため，本書の内容は門外漢でもその背景

を理解しながら読むことができる．山地研究者のみならず，観光やエコツーリズム，少数民族，森林資源などに関心をもつ幅広い読者にとっても興味深い議論を提示しており，広く勧めることができる．また，著者の示す，エコツーリズムや環境運動が一般の人々にどう受容されているのか，という問題提起は，2010 年にカレンの焼畑をユネスコの世界遺産に登録するための委員会が立ち上がった現在，そしてカレンの人々がおかれている状況の今後を考えるうえでも非常に重要である．タイのカレン社会を研究する後輩として，著者の今後の展開にも期待したい．

鈴木正崇．『ミャオ族の歴史と文化の動態―中国南部山地民の想像力の変容』風響社，2012 年，560 p.

宮脇千絵 *

本書は，中国西南部に居住するミャオ族の儀礼活動に焦点を当て，ミャオ族が豊かな想像力でもって培ってきた世界観を描くとともに，それが近年の経済的発展や政治・社会状況の影響などによりどのように維持されているのか，あるいは変化しているのかを記述している．

本書は八章から成り，1988 年から 2010 年のあいだに発表された 9 本の論文をもとにした集大成である．以下に各章の内容の簡単な紹介をし，評者の見解を述べる．

第一章「ミャオ族の神話と現代―貴州省黔東南を中心に」では，ミャオ族の神話の変化と差異性が宗教文化の再構築に果たした役割について論じている．著者によると文字をもたないミャオ族の神話は豊かな想像力を原動力とする口頭伝承で伝えられ，儀礼と連続性をもっていた．しかし，1980 年代以降の「民族文化」を重視する動きの高まりのなか，民族意識の再構築の源泉として，民族エリートや知識人によって，神話が文字テクスト化される．これにより，神話が画一化され，儀礼との連続性が失われ，さらには神話が読み替えられることによって新たな言説が創造された．新たな解釈が儀礼や日常生活に浸透することを，著者は「可視化される神話」と呼び，それが，無文字という「周縁」，地理的「辺境」を生きるミャオ族の中心に対する対抗言説であると同時に，宗教文化の再構築の道であることを示唆している．

第二章「祖先祭祀の変容―貴州省黔東南雷山県烏流寨の鼓社節」では，13 年に 1 度おこなわれる祖先祭祀である鼓社節について 1997 年に調査した事例をもとに詳細に描き，既往文献との比較検討をおこなっている．そして過去と現在の鼓社節の共通項として，木鼓叩きと水牛の供犠の重視があることを指摘している．一方で，変化もしている．鼓社節を支える組織は，祖先を同じくする父系親族集団であったが，現在その担い手は，血縁から地縁へ，そして行政の関与へと移行していること，ならびに経済や社会の変化の影響を受け，客人への土産があの世の祖先を満足させるための水牛の肉から，この世の人びとの身近にある豚肉へと変わったことも指摘し，

* 国立民族学博物館・外来研究員